柳川教授:"氏神"のような指導教官

中　牧　弘　允
(昭和48年修士修了)

1970年，修士課程に入ると，念願通り柳川助教授が私の指導教官となった。当時の私はレヴィ＝ストロースやエリアーデ，あるいは山口昌男などの〝教祖〟に魅了され，「聖と俗」「神話と儀礼」というようなテーマに関心をもっていた。しかし柳川助教授との出会いは，それらの〝教祖〟の存在をかすんだものとしてしまった。なぜならわが指導教官は〝教祖〟のようなカリスマ性を欠くかわりに，〝氏神〟のような厳しさと優しさを兼ね備えていたからである。

〝氏神〟の口から発せられる言葉は，時として〝託宣〟の重みを持ち，〝氏子〟たる私はそれに従うのを常としていた。修士論文はフィールド・ワークにもとづいて書こうと心に決めてはいたが，どこをフィールドにするかは決めかねていた。そんな時，柳川ゼミの調査地のひとつである常呂に単独で入るよう〝託宣〟がくだった。意を決して常呂に出かける前日，酒をこよなく愛するわが〝氏神〟は〝氏子〟との直会の機会をもうけてくださり，「調査資金は本を買ったと思ってやれ」との〝託宣〟をたれて，いろいろ激励してくださった。かくして3カ月程の調査にもとづき，修士論文は無事完成した。

その後，柳川教授と私は共著で論文「宗教変動の解釈をめぐって――北海道常呂町の宗教と社会――」を『思想』誌上（1973年9月号）に発表した。これは共著とはいうものの，私は若干の資料の提供と下書きの手伝いをした程度で，柳川先生の書きおろしともいうべき論文であった。共著は予想外であった。なぜならふつう指導された学生の論文に指導教授が形式的に名前を連ねることが多いのに，事態は全く逆だったからである。かくして私の処女論文は畏れ多くも〝神人合一〟の形態をとってしまったのである。

この論文の後にも柳川ゼミでは何度か常呂に出かけたが，1975年の調査の際，柳川先生はＮＨＫテレビに出演し，マスメディアを通じて「北海道の次はハワイやアメリカ」との〝予言〟をくだした。そしてこの〝予言〟は1977年から1981年までの都合3回の海外調査となって的中したのである。

しかしながら文部省科学研究費によるこの海外調査は，運悪く柳川先生の体調のすぐれない時期と重なってしまった。神輿に乗った〝氏神〟は御神幸の足をハワイやカリフォルニアにのばされ，国内よりもはるかに元気で調査に従事された。しかしこの頃から，身体の不調と多忙のせいからか，まとまった長文の〝神託〟を聞くことはめっきり

少なくなってしまった。現在，〝柳川村〟の多くの住人達はさびしさをかこっている。

ところで比較的忠実な〝氏子〟である私も〝氏神〟に抵抗したことがある。博士課程に進学した頃かと思うが，柳川教授からテキサス州のライス大学に留学しないかと勧められた。そこには日本の社会や宗教を研究している文化人類学のN教授がおられたからである。しかし当時の私はわざわざアメリカに留学してまで日本のことを研究する気になれなかったし，柳川ゼミが楽しみでもあったから，日本で柳川ゼミに出れるほうが自分にとってははるかに意味のあることだと答えて断った。指導教官の勧めに従わなかった数少ない例の一つであるが，この選択は今でもまちがっていなかったと思っている。